

城址公園の木

=その3=

シダレヤナギ

太田道人

暑い日だというのに、城址公園の堀のまわりだけは、涼しそうな感じがします。このように感じるのは、堀に水があることのほかに、まわりに植えられたシダレヤナギも、一役かっているようです。シダレヤナギのたれ下がった長い枝がたなびく様子に風を連想して、暑さをちょっと忘れるからでしょうか。

桜の花が咲いていた頃、あわい緑色になって桜のうす紅色をひきたてていたシダレヤナギに、どれだけの人が気づいていたのでしょうか。この時、シダレヤナギの枝には、たくさんの花が咲いていたのです。

今回は、深い緑色にそまったシダレヤナギの枝と葉に注目してみよう。

シダレヤナギは、普通の植物とちがって、細い枝は下に向かって伸びていきます。枝が伸びる速さはたいへん速く、一年で3m以上も伸びるといわれています。おそらく植物の中で一番速いだろうと考えられます。日あたりがよいと、特によく伸びます。水ぎわに植えた場合、太陽の光を照り返す水面が明るいので、水に面した側の枝は、どんどん下へ伸びていきます。

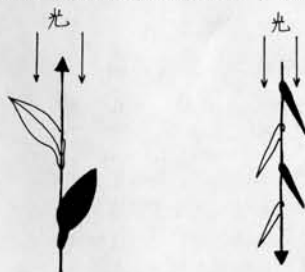
さて、葉の方は普通の植物と同様に、葉の表側が枝の軸に面して出てきます。枝が上に向かって伸びる植物の場合、葉が生長して大きくなれば、葉は自然に表が上になります(図1)。しかし、逆に枝がたれ下がるシダレヤナギの場合、枝についている葉は、光のくる方向に対して裏側を向けることになります。(図2)。でも、そうなると大変です。植物の葉は、光のエネルギーを利用して栄養分を作り出すための葉緑素というものをもってい



図3 矢印のところで180°ねじれている。この葉緑素は、葉の表側にたくさんあって裏側には少ししかありません。したがって、葉の表に強い光があたらないと、植物は栄養不足になって成長できなくなります。

そこでシダレヤナギは、光が来る方向に葉の表を向けるため、葉の柄のところで半回転ひねりを行います。葉の表側が、枝に対して外側に向くことになります(図3)。このひねりの能力は、若葉が出てから2・3日目ぐらいにそなわってきます。大きくなった葉でも、枝を切りとってきかさに立てておくと、裏がえった葉は再び柄のところで半回転ひねりをおこなって、表が外側を向いてきます。

このように、一見たれ下がっているだけに見える枝や葉も、少しでも多くの光を得るために、細かな調節をしているわけです。城址公園の堀のまわりには、20本あまりのシダレヤナギが植えられています。もし、堀のふちを通ることがあれば、一度シダレヤナギの枝を手にとって、葉のつき方を観察してみてください。(おたみちひと植物担当)



■は、葉の裏側を示す。
図1 普通の植物 図2 シダレヤナギ

表紙によせて

ハコネサンショウウオ

日本産のサンショウウオの中では最も分布が広く、四国、本州の山地に生息します。海岸に近い所から標高2,000mを越す高山にまでみられます。産卵は源流の石のすきまで行なわれ、この時期のオスとメスには、流れに流されないためか、手足の指の先に黒い爪がはえています。

(文・写真 南部 久男)